

新「艦娘グラフィティ 2」
(第13部)

しろっこ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「艦これ」二次創作小説である「美保鎮守府シリーズ」から大井の過去話です。

美保鎮守府本編の前史、舞鶴鎮守府でのストーリーになっています。

設定だけですが、今の美保司令が作戦参謀として話題に上ります。

まだ艦娘の量産化が確立されていない時代背景です。従って彼女たちは、それぞれが唯一の存在。轟沈したら終わりという世界です。

なお、その後ブルネイを舞台にした第3シリーズで、艦娘の量産化が確立するというお話に繋がります。

元のシリーズや本編を読まなくても楽しめるように書いています。短編ですが今後、

ストーリーが追加される可能性はあります。

(展開)

ハーメルン, 暁, t i n a m i, p i x i v, 独自サイトでの展開を予定しています。

目次

舞鶴の大井

1

舞鶴の大井

「……いつか、分かる時が来るよ」

新「艦娘」グラフィティ2

(第13部)：舞鶴の大井

今日も負け戦だった。私たちは、やつとのこととで戦場から帰還した。かろうじて轟沈は免れたが、ほとんどが中破に大破だ。

舞鶴の埠頭に到着して状況確認をしていたけど……新人艦娘たちの要領を得ない堂々巡りの返答に私はついカツとなった。

「あんたたち！ そんなに死にたいのなら、もう勝手になさいっ！」

突き放すように言ってしまった。埠頭の駆逐艦娘たちは凍り付いた。

しまった……と思ったときには、もう目に涙をためている艦娘たち……ああ、見てら
ンない。余計イライラする。

私は他の艦娘に慰められて泣き崩れる駆逐艦を放って、サツサと埠頭を離れた。

「ああ、今日もまた同じことの繰り返しか」

最近、どうも戦況が芳しくない。

イラつくから艦装もギシギシと壊れそうな音を立てて、いくつかの部品がポロポロと転げ落ちている。

私は大井。最近、重雷装艦に改装されたばかりだ。せっかく『あの人』とまた同じ戦場でペアを組んで戦えるかと思ったのに、その目論見（もくろみ）は見事に崩れ去った。私が尊敬し敬愛する『あの人』はここ舞鶴鎮守府の第一防衛隊だ。ところが私は新しく作られた第二防衛隊となって新人の駆逐艦たちの面倒を見る羽目になった。

自分自身の艦装も不慣れなのに、その上、新人を押し付けられたのだ。

「イライラもするわよ」

しかも私の直接の指揮官が、これまた着任したばかりの新人作戦参謀だ。

別にクソ提督にへボ参謀なんて掃いて捨てるほど見てきたから構わない。ただ今度の新人参謀は、やること成すことすべて頭にくる。なぜだろうか？

「今日の作戦だつてそうよ」

もつとバランスを考えて欲しい。新人相手に四苦八苦している私に、いきなり実戦は無理だつて。

工廠で艦装を外し技師から修理箇所の確認を受けた後、書類に署名をする。頭に来て

いるから鉛筆の芯が折れるほどの勢いで署名をした。書類が半分グチャグチャになる。「チッ！」

思わず舌打ちした。余計イラつく。

そんな私の剣幕に工員がビクビクしていた。また私の変な噂を流されるんだろうけど……そんな事は吹っ切るように私は呟く。

「構わないわ」

私は自分のロッカーで着替えと洗面用具一式を掴むと、再び風を切る勢いで廊下へ歩き出す。すれ違う職員や他の艦娘たちが私を避けるのが分かる。

「勝手にしろ」

何か強い口調で話していないと負けそうになる。そのまま工廠施設へと向かう。

今日は、いつもより早く入渠施設に到着したので空いていた。ただ、あまりにも頭にかけているから脱衣所でも周りがほとんど見えなかった。

そのままタオルだけ掴んで施設の中へ入り空いている湯船に思いつき飛び込む。

「はぁ……」

施設内の大きな窓からは植え込み越しに舞鶴の、まだ明るい海が見えた。

「水平線か」

それを見てみると、ちよつと落ち着いてきた。余裕が出た私は考える。思えば、あの

新人参謀が来てから、ろくな事がない。

フツと呟く。

「一生懸命にやっているのは分かるわ……むしろ並みの新人よりは的確だし言葉遣いも丁寧で、そこんところは認めるわ」

なのに……なぜか頭にくる。その存在自体が。

「バカバカしい」

アレコレ考えるのが面倒になってきた。モヤモヤした考えを吹っ切るように改めて首まで湯船に浸かった。

ガラガラの施設内。そっか……私は帰還した新人たちを放つたらかして来たんだ。

「工場の確認まで、すっ飛ばして真っ先にここに来たから」

ついカツとなって大人気（おとなげ）なく突っ走ってしまったかも知れない。そこは、ちよつとだけ反省。

ふと見上げるとタイマーもカウントダウンを始めている。入渠に必須な残り時間も意外と短いようだ。

「それほど被害は無かったか」

あの新人たちは私に恐れをなして多分、ワザと遅れて、この入渠施設に来るだろう。

「彼女たちには悪かったけど」

……それなら逆に鉢合わせする心配もないか。

「やれやれ……面倒だから作戦参謀への報告は明日にしてやろう」

そう思っていたら横から声を掛けられた。

「へえ、作戦参謀への報告を引き伸ばして大丈夫なの？」

この声は……

「あ、はい！」

私は、それまでの不満タラタラの態度から真面目モードに切り替えた。自分自身で切り替えの早さに呆れるくらいだった。

「新人相手で臆装も不慣れでサ、おまけに参謀とも上手くないんだ。大変だねえ」

この声は……だめだ！

私は観念して小声で釈明をする。

「北上さんには……すべてお見通しだったのね」

「だって大井つちサア、思っていること全部、喋ってるんだもん。そりゃ誰でも分かるよ？」

……すごく、すごく恥ずかしくなった。

私は思わず声のするほうとは反対側に顔を背けて湯船に顔を半分沈めた。カニのように口から泡を吹き出すと湯船にゴボゴボと水泡が弾ける。

北上さんは浴槽のへりに手をかけて言った。チラツと横目で見ると、お湯で黒髪がワカメのように、ぺったりと張り付いているのが艶（なまめ）かしい。

「いいよ、恥ずかしがらなくても。そこが大井つちらしいから……でもさ、いつまでもそれじゃあね」

「ええ、それは分かっています！」

自分で赤面しているのが分かる。

「言われなくても分かっているんです！」

ムキになったように釈明する私に北上さんは笑ったようだ。

「そうだよねえ、分かっているのにサ、どうしようもない事つてあるよ。そうそう」

あれ？ もっと突っ込まれるかと思ったのに。

「良いんだよ、それで。アタシもさあ最初はそうだったよ。あの参謀とだってバトルしたこともあったっけ」

「えー！」

思わず振り向いてしまった。湯気の向こうに彼女の笑顔があった。

北上さんは長い髪の毛を毛筆のように弄（もてあそ）びながら言った。

「でもさあ、お互いに似た部分があるから……ぶつかるとてもあるらしいよ」

「そうなの？」

よく分からない。

「まあ、少なくとも同じ艦隊の艦娘も参謀も、アタシたちの敵じゃないからさ。早く一つにならないとね」

「だから……っつて」

急に何かが私の中で、こみ上げてきた。

「分かつてます！ 分かつているんですけど……」

ついに私は立ち上がってしまった。壁のタイマーが一瞬停止する。

「ほら、時間は貴重だから。ちゃんと浸かつて」

北上さんに、そう言われた私は改めて湯船に浸かった。

彼女は私を見ながら表情を変えずに続ける。

「一応、参考までに言っとくけどさ。あの参謀は、あんたのこと実は、すごく心配しているんだよ」

「ええ！ まさかあ」

私は信じられなかった。

「……」

彼女は私より遥かに能力が高くて、いつも冷静だ。そして作戦参謀や自分が率いる第一防衛隊の艦娘たちとも上手くやっている。

「羨ましい」

思わず呟いた。すると北上さんが私のほうを見たので視線が合つて……思わず顔が火照つた。赤面しているのだろう。

「今は信じなくても良いけど……いつか、分かる時が来るよ」

そう言つた彼女は何事も無かつたように再び正面を向いて湯船に深く浸かつた。

私は、ちよつと混乱していた。本当に分かる時が来るのかしら？

「いつの日か……」

でも今は、その言葉を信じるしかない。あのタイマーのように私の心の隙間も少しずつ埋まる日が来ることを願つて。

「そうそう、私は大井つちを信じているからサ」

「はい」

最後の言葉が心に響いた。

「ありがとう、北上さん」

私も素直にそう言えた。

「うん、その意気だよ大井ツチ」

彼女は微笑んだ。